

う

つとり、ときに呆然、あるいはにんまりとつつ、男たちの聖域を探し、追いかけて

たこの連載もついに最終回。もう男の聖域なんぞ残っていない……と思いきや、おっと、ありました。「野郎だけ」の美しき世界が。都会のどまんなか、そこだけぼっかりと異次元空間のごとく、絢爛と光り輝く男の聖域、歌舞伎の世界が。

職業選択の自由が許され、万人は平等ゆえに実力次第で出世が決まることになっているこの時代に、歌舞伎界の男だけは「不自由」「不平等」に見える。生まれながらに歌舞伎役者になることを運命づけられ、幼少時から舞台上に立ち、時が満ちれば出世魚のように襲名していく。そうして脚光を浴びる歌舞伎エリートは血縁のある御曹司ばかりで、基本的にほとんどに実力があっても、門閥の外ならば「出世」は見込めない。ほかの世界ならば時代錯誤もの。

ああしかし。歌舞伎界は世の中がどう変わろうと、もはやおとぎ話レベルの昔々の秩序を淡々と守り抜く。時流など知らん。歌舞伎は歌舞伎だ。この頑なさこそが、おそらくその不動性ゆえに、歌舞伎ワールドにファンタジーの色合いを与えているのではないか。中村獅童も、市川海老蔵も染五郎も、歌舞伎の国の王子様。庶民国の最新モードをまとった姿がひとときワセクシーなのは、「あら、越境していらして」とあらぬドキドキを感じてしまつてこちらの妄想のせいだ。

大昔からのスタイルをそのまま踏襲することが、歌舞伎の命脈。とはいえ、アクロバティックなスーパー歌舞伎が話題になったこともあり、実は時代に合った工夫をさりげなく行っていたりするものなのか？ 長年、歌舞伎の大道具に携わる裏方さんが、そんな愚問にさらして答えてくれた。



「時代に合わせて変わっていくなんて、ほかのお芝居にまかせておけばよいこと。歌舞伎は、変わる必要がないんです。変わらないうちに意義があるんですよ」

時代に迎合などしない歌舞伎は、観客が学ばなくてはならない約束事

やが決まりの様式で成り立っている「俺様」芸術でもある。黒衣（くろご）が登場しても見えていないものと思え、とが、座ついても「寝の形」をとつたら寝ているとみなせ、とが。と素人の観客にはやさしくないのである。

この世のものならぬ女形。そのファンタスティックな異形ゆえに一挙一動を食ひ入るように見えてしまい、これまた気がつけば、世俗的な性別分けなど意味をなさぬワンダーランドのキャラクタにすっかり虜になっている。

時代がどう流れようと、スティックに、自信に満ちて、「俺様が正しさの中心である」と揺るがず行動し続ける、魂の筋肉が太い男。これぞマッチョにほかならない。極上マッチョ、歌舞伎のなかに見つけたらしくと見得をして筆者飛び六法で花道を引込みます。ご愛読ありがとうございました。

Sanctuary of the Lost Samurai

中野香織の「落日のマッチョ」【最終回】

“梨園”で見つけました！ 探し続けた究極のマッチョ

オトコの聖域を探し求めたこの連載も最終回。カワイイ、無邪気なマッチョたちをもっと見てみたい気もするが、「腹八分目」が健康の秘訣。このあたりで幕を引きます。

Text by Kaori Nakano Photos by Kenji Miura



中野香織 (なかの・かおり)

服飾史家・コラムニスト。1962年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。「モードの方程式」がマッチョな話題も含む鼎談を収録して新潮文庫になりました。

九代目中村福助文。1 どんな美女も太刀打ちできない妖艶さをもつ「お約束事の女」ができあがっていく。2・3 成駒屋が大切にしていたきた踊り、京鹿子娘道成寺の白拍子花子。(協力：松竹株式会社)

